

う話があつて私は半ばあきらめていたが、その後正式な発表で、帰国は全員となつて、思わず飛び上がったのである。

帰路は、ケメロボからシベリア本線に入つてナホトカに行くもので、往路と同じ大型貨物車利用であるが、八月ということもあり、また一段当たりの収容人員も少なくてゆつたりとした旅となつた。しかし我々炊事班は、十八トンという小貨物車に釜が二基築かれ、これに乗つて三度の食事をつくりながらの帰路となつた。長時間停車駅では、ビアだるを担いでの水汲み、まき割りや休む間もなく働き、食事間のわずかな時を休息するという過酷な労働を五日ほどやりながら、八月十日にやっとナホトカ着となつた。

ここで最後の労働として、炊事の釜壊しがあつて、すすで真っ黒になつて第一収容所に入つたのである。第一及び第二収容所は港湾労働に狩り出されたが、第三収容所に入つて、やっと帰国船を待つばかりとなつて落ち着くことができた。八月十五日に第一大拓丸が到着し、岸壁で姓名を読み上げられてタラップを上が

り、甲板に足を着いた途端全身に感激が走り、涙がとまらなかつた。

第一大拓丸は、油なぎの日本海をゆつくりと故国に向かい、途中、親ソ行動の際立つたオルガナイザーへの暴行事件があつたりしたもの、八月十八日、舞鶴港に到着、夢にまで見た故国の土を踏むことができたのであつた。

シベリア挽歌

岩手県 及川 新 蔵

とにかく暗いし窮屈で身動きができない。有蓋貨車につくつた二段ベツトは、起きれば頭がつかえるし寝れば横になつたままみたいなきゆうぎゆう詰めで、何ともやりきれない。が、しばらくの辛抱で懐かしの故郷へ帰れるのだからと言ひ聞かせながら、皆比較的明るい表情で振る舞つていた。何日か後に奈落に突き落とされることも知らずに。

満州の収容所では食糧らしいものの配給もなく、分隊から使役が出て自分たちの食糧を確保しなければ餓死するほかない生活だったし、第一食糧を確保するということは、満人の農家の畑を荒らし回って盗んでくるとのことだから、農家の側では必死になって追い払うし、だんだん鉄砲を撃つ満人がいて犠牲者も出る始末になった。日数を経るにつれて野越え川越え遠くに行かなければならなくなったが、しかしとってくるものはデントコーンに大根のようなものばかり、塩気のない生活が二か月も続いた。

今、減塩々々と言うが、長い間塩分をとらないと随分体が衰弱するものである。塩気のないのに加えて動物蛋白が全然ない。庭に穴を掘って水をためたら自然にカエルが寄って来て、それを捕まえて焼いて食べたもした。体が要求すれば気味悪いも汚いもあつたものではない。それを思えば貨車の生活は一応どろっとしたかゆ状のものでも、サケの空き缶に半分くらい配給になるし、あの固いデントコーンをかじるよりはましな生活に思えたものである。

何か月も戦争以来風呂に入っていないし、いつの間にか疥癬（かいせん）になって、かけばかくほど広がってきて何ともやり切れない日々が続いた。これはシベリアにいる間じゅう私を悩まし続けた病氣の一つである。

こんな状態で入ったのだから、もうその時点で栄養失調になってフラフラしていた。しかも装備が悪い。磨刀石近くまで進出して横道河子に撤退するうちに、小銃と弾と手榴弾三発、雑のう一個、それ以外は全部捨てて夏服ときているから、半月も乗った貨車からおろされたときの寒さと、編上靴で凍った道を歩くことわざと冷たさは、本当に大変なところに連れて来られたという思いでいっぱいであつた。兵舎で終戦を迎えた人たちは冬物も携帯しておりうらやましい限りであつたが、何も持たない我々は夏物でシベリアの冬に直面させられてしまった。しかし士官候補生で軍曹の階級章あるがゆえに、最も選りすぐりの作業大隊に転属、分隊長をすることとなった。

そのときようやく普通外套と毛布一枚、防寒帽の支

給があつた。転属して翌日から早速露天掘りの炭鉱作業に出なければならなくなった。皆は防寒外套に防寒靴なのに最も年下の分隊長は昨日もらったばかりの毛布を切り裂いて股や胴体に巻き普通外套を着て出たが、編上靴だけではどうすることもできなかった。厳寒の十二月零下三十度以上の中での寒さと足の痛みは絶頂に達し、ソ連兵の威嚇も何も耳に入らず火に寄って行ったことは忘れられない。兵舎に帰って見たら、足の小指に大きな水ぶくれができており、翌日医務室に足をひきずりながら出かけて行くこととなった。軍医は即座に「凍傷だな」と一言言つたと思つたら、はさみを出してきてその水ぶくれをパチンと切り取つてヨ―チンを塗り、包帯を巻いて「明日また来い」と無造作に言う。他人の体であればどんなに切り刻んでも痛いわけではないが、このときの痛みも生涯忘れたい痛みであり、今でも思い出せばゾツとする痛みである。

転属して来た翌々日から練兵休で兵舎の中の生活をする事となるが、初婚のような私が働かずにゴロゴロしていなければならないとは何と因果なことか。階

級こそ私より下だが兵歴も人生経験も豊富な分隊員でなかなか口うるさく、気を遣うことおびたしい。しかし世の中なべて塞翁が馬のたとえどおり、そのときの四十日の練兵休が私が生きて帰れた大きな原因だと思つてゐる。

入ソ当時の給与は極端に悪く、民間人に食糧倉庫が襲われたとか何とかいってニシンを煮たらしい塩湯だけだったり、朝のうちに配給になる昼食は、現在の日本のサービスマッチ二個分くらいの黒パン二片だけ、しかもそれはフスマかコウリヤンの皮でつくつたものといったぐあい、とても命をつなげるようなものでなかったからだ。私が作業に出るようになったときだつて給与がよくなつたわけではなかったが、幾らかでも体力の消耗を防げたと思うし、そのうちに防寒具の支給もあつたから何とかなつたのだと思う。

その防寒具の防寒外套は緬羊の毛皮で、表は真っ黒に油じみ裏は緬羊の毛そのままの重い外套で、帰国の折もそのまま着て帰り、未だに我が家にぶら下がっている。この外套を着せられたシベリアの流刑囚人がど

んな思いをし、どんな涙を流したのかを思えば、我が身のつらさとともにうかつに捨てる気にはなれないからである。

兵舎は半地下洞窟で、入りたては真新しい丸太でつくられており、できたての兵舎であった。恐らくドイツの捕虜にでもつくらせたものか。この中は薄氷の張るくらいであったが、幕舎生活の人よりはよかつたかもしれない。夏になって雨が降ろうものなら、屋根は土を乗せたばかりだから漏るところでなく、持ち物はグシヨグシヨ、水かきしないと中に入っておれない。狭いところに雑魚寝なのだから、湿気が充満して疥癬が横行する。明るかつたらいたたまれないほど不潔なはずなのだが、日中も薄暗いから余り目立たなかつたのだろう。とにかくどこへも行く当てがないのだ。

冬の便所も大変である。兵舎を出て四、五十メートル走らないと便所へ行けない。外は零下何十度なのか。体のしんまで冷え切つて朝までふるえていることもたびたびであった。そんなある夜、便所のそばにあつた死体置き場あたりでカラカランカラカランと音がする。

目をこらして見ると、木のように固くなった死体を材木でも積むように二人のソ連人が放り投げながら積んでるではないか。栄養失調でやせ細つた死体はトラックにうづ高く積まれて夜陰にまぎれてどこへ運ばれたのだろう。昭和二十一年の早春にはまだ墓掘りの使役に出たことも聞かないし、一日に十人、十五人と死ぬ人があつて墓掘りが間に合わなかつたはず。あの死体はどこに行つたのか気になるところである。

疥癬の重症患者を集めて疥癬中隊、鳥目になつた者を集めて夜盲中隊、全く生地獄とはこういうところを言うのではないだろうか。

無 題

神奈川県 田 口 幸 安

昭和二十年八月八日、私が入宿番で立哨中の払暁、遠くで砲声がこだまする。非常呼集がかかる。虎林虎頭方面空爆中の非常事態宣言下る。